

万年筆の旅

Vol.
15

吉村昭記念文学館 News



特集 第9回著作紹介 「コロナ禍の今、読んでほしい吉村作品」

CONTENTS

第9回トピック展示開催報告

「吉村昭と震災小説 ―「三陸海岸大津波」と「関東大震災」を中心に―

第10回トピック展示開催報告

「瀬戸内寂聴と津村節子」

#『黒嵐』実物大再現パネル フォトスポットのご紹介

足跡を訪ねて～愛媛県宇和島市 やまこうどん～

おしどり文学館協定 荒川区・福井県合同展示のお知らせ



INFORMATION

集まれ!!!



世界一吉村昭が好きな人

吉村昭記念文学館では、友の会会員を随時募集しています。

会員になると限定グッズやイベント優先募集等の特典があります！

【会員区分】

個人会員（1年）1,000円

個人会員（3年）2,500円

法人会員 3,000円

賛助会員 1口 2,000円 から

詳しくはHPを
ご覧ください！



皆さまのお申込み心よりお待ちしております。

企画展のお知らせ

「戦後75年 戦史の証言者たち―吉村昭が記録した戦争体験者の声―」

ウェブで開催 11月21日(土) 常時公開

今年度第1回目の企画展は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ウェブで開催することとなりました。展覧会の特設サイトを開設し、原稿や取材ノートを解説文とともに紹介します。お手持ちのパソコンやスマートフォンから、いつでもどこでもご覧いただけます。普段なかなか文学館にお越しいただけない方も、この機会にぜひお楽しみください。

※企画展示室での展示はございません。ご注意ください。

〈本展へのアクセスはこちらから〉

<https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/senshi2020/>



文学館職員の読書感想文

「戦艦武蔵」



2015年3月、フィリピン沖の深海で戦艦「武蔵」の船体が発見された。その映像をワクワクしながらテレビで観ていた事を記憶している。そんな時、吉村先生の「戦艦武蔵」を読んでみようと思った。

武蔵を建造する過程では、様々な困難を知恵と工夫で乗り越える様が緻密に描かれており、日本のモノづくりの優秀さ、技術力の高さを感じることができる。しかし、46センチ砲を主役とした設計では、主砲発射により発生する爆風で甲板上の人が致命傷を負ってしまう。軽量化を優先させた零戦と同じで、速く速く飛ぶために、人が使うものという視点が軽視されている。

人が必要とする機能に対して、オーバースペックになる傾向は、苦戦する日本のモノづくり産業にも通じている。生き残るための戦略の大切さを痛感させられる作品だ。

編集後記



リニューアルした「万年筆の旅」いかがでしたか。皆さんに、より一層、親しんでいただける誌面を目指しました。vol. 1を発行した平成25年から7年が過ぎた今、世の中はコロナ禍にあります。メディアでの言及も見られますが、これまでも困難な事態に直面した時、私たちは吉村作品を手に取り、再読することで、新たな気づきを得てきたということを改めて思い返しています。

今号で紹介の通り、当館では、定期的に開催するトピック展示のほかにも、作品に関するフォトスポットを設置するなど、新たな試みを行っています。また、遠方にお住まいの方や、ご自宅でご覧されている方にもお届けしたいという思いから、ホームページでは、資料を掲載した解説シートを公開し、荒川区ツイッターでの作品紹介も続けています。11月21日からは、初めて企画展の特設サイトを開設し、ウェブで展示をご覧いただけます。今後の活動も、どうぞご期待ください。次号もお楽しみに！



吉村昭記念文学館 ニュース

万年筆の旅 vol. 15

令和2年10月31日発行

■ 編集・発行/荒川区 登録番号(02) 0049号

■ 問合せ/吉村昭記念文学館

〒116-0002 東京都荒川区荒川2-50-1 ゆいの森あらかわ内

TEL : 03-3891-4349 FAX : 03-3802-4350

URL : <https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/>

【開館時間】9時30分～20時30分 【入館料】無料

【休館日】毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他

【題 字】津村節子氏 【切り絵】山崎達郎氏

アクセス

- ・都電荒川線(東京さくらトラム)「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車……………徒歩1分
- ・東京メトロ千代田線「町屋駅」2番出口、京成線「町屋駅」下車……………徒歩8分
- ・コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
- ・東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線「大手町駅」→「町屋駅」(乗車13分)

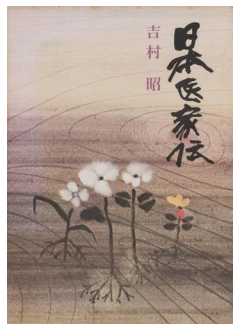
コロナ禍の今、
読んでほしい吉村作品

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、私たちの日常生活に影響を及ぼし、多くの命が失われました。

第9回は、コロナ禍の今、改めて皆さんと共に読みたい吉村作品を紹介します。

新型コロナウイルス感染症は、令和元年（2019年）12月、最初に原因不明の肺炎として報告されました。令和2年1月31日には、世界保健機関（WHO）が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」に該当すると発表し、日本でも感染者が急増しました。4月7日、政府は、緊急事態宣言を発令し、日常生活は刻々と変化しました。今なお、医療現場では、懸命な治療や取り組みが続けられています。

文芸では、終息の兆しが見えず、新たな生活スタイルが模索される中、カミュ『ペスト』（宮崎嶺雄訳 昭和44年新潮文庫）が35万部以上の増刷となるなど、感染症の恐怖に直面した人間の在り様と社会の変化を描いた小説のほか、感染症の歴史や対策を記した作品に関心が寄せられています。



昭和46年（1971年）
講談社

医学の道に生きる人びと

『日本医家伝』

―近代医学の礎を築いた12人の医家

江戸時代中期から明治初期にかけて、日本の医家たちは西洋医学の流入に身をさらし、或る者は反発し、或る者はそれを積極的に受け入れようとした。そうした混乱の中で、すぐれた医家たちによって新しい日本医学の基礎はきずかれていった。

「あとがき」『日本医家伝』昭和46年 講談社
今もなお、新型コロナウイルスの脅威にさらされながら、最前線で患者の治療にあたっている医療従事者の皆さん。コロナ禍は、彼らの仕事やその存在に思いを巡らすきつけにもなりました。そこで「今、読んでほしい吉村作品」2作目は、医学の道に生きた人びとの物語を紹介します。

短篇集『日本医家伝』は、激動の時代に新しい医学の道を切り開いた医家12人を描いた作品です。昭和43年から46年にかけて、医学雑誌「CREAT A」に連載され、同46年に加筆改稿し

吉村作品では、ある海辺の村に伝わる風習が招いた災厄を描く『破船』（昭和60年 新潮文庫）が広く読まれ、増刷されています。また、天然痘の予防法である種痘の普及に取り組んだ医家、笠原良策を描いた『雪の花』（昭和63年 新潮文庫）をはじめ、医学を題材とする著作も注目を集めています。これらの作品は、コロナ禍を生きる人びとの指標となるのではないのでしょうか。

そこで今回は〈災厄に直面した人間の姿〉、〈医学の道に生きる人びと〉、〈江戸時代、伝染病予防に取り組んだ人物〉という視点から『破船』、『日本医家伝』（昭和46年 講談社）『北天の星』上・下（昭和50年 講談社）を中心に紹介します。

＊『雪の花』（昭和63年 新潮文庫）は、「万筆の旅」VOL.14で紹介しています。ホームページでもご覧いただけます。

＊今回取り上げた作品は、ホームページでも紹介しました。併せてご覧ください。

て単行本を刊行、同48年に文庫化（講談社文庫）されました。

その12人とは、山脇東洋・前野良沢・伊東玄朴・土生玄碩・楠本いね・中川五郎治・笠原良策・松本良順・相良知安・荻野ぎん・高木兼寛・秦佐八郎です。

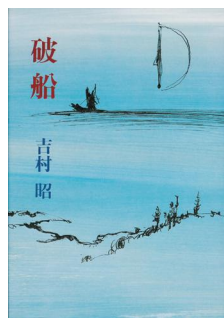
この作品の読みどころは、12人が残した顕著な医学業績はもちろんのこと、それぞれの人間味あふれる個性豊かな生き方にあります。吉村は「時代の厳しい制約の中で、自己に忠実に生きようとした姿」に気持ちが奮い立ち、書き上げることができたと述べています。新しい医学と向き合いながら、如何に生き、何を成し遂げたのか。是非、本を読んでその姿に触れてみてください。また、併せて読みたい作品が、随筆集『お医者さん・患者さん』（昭和60年中公文庫）です。心に残る医者とのふれあいを描いています。患者にとって良い医者とは、医者からみた良い患者とは。改めて、医者と患者の望ましい関係を考えさせられる作品です。

〈学芸員 鈴木志乃〉

災厄に直面した人間の姿

『破船』

―生きるための風習
「お船様」と「赤い着物」



（右）昭和57年（1982年）筑摩書房
（左）昭和60年（1985年）新潮文庫

もしも、お船様の到来がなければ、とうの昔に村は消滅し、ただ岩礁のひろがる海のある地にすぎないものになっていただろう。先祖がこの地に生き、自分たちも生活してゆけるのは、お船様の存在によるものなのだ。

『破船』は、日本海沿岸に見られる江戸初期の古記録などを基に執筆された虚構小説です。吉村は、習俗に関心をもった新潟県佐渡島を、背景の地として構想しました。「人間の優しさ」と残酷さ、それを描いてみたかった」とも述べています。昭和55年（1980年）7月から翌年12月まで『海流』（ちくま 筑摩書房）として連載し、加筆後、『破船』

江戸時代、伝染病予防に取り組んだ人物

『北天の星』

―運命に抗い生き抜いた男、中川五郎治



昭和50年（1975年）講談社

長崎系の種痘法は全国にひろがって定着し、それに努力した医家たちは医学史にその名をきざまれたが、その導入よりも二十五年も前に種痘をおこなった中川五郎治の名は消えたも同然の扱いを受けた。それは、かれが種痘の重要さを知らず生活の資としてのみ考え、その技術を他の医家たちに伝えることをしなかったためであった。

『北天の星（下）』昭和50年 講談社
「北天の星」は江戸後期に実在中川五郎治に関する史料を元にして描いた長篇歴史小説です。昭和50年（1975年）に刊行され（講談社）、昭和55年に文庫化（講談社文庫）、平成12年（20

（昭和57年 筑摩書房）として刊行しました。同60年には文庫化（新潮文庫）されています。吉村作品では、最も多くの言語に翻訳されています。

小説の舞台、ある海辺の寒村に伝わる「お船様」とは、塩焼きの火に誘われた船を岩礁で座礁させ、積み荷や建材を奪い、糧とする風習です。船に乗っていた人間の命も奪う苛酷なもので、村人は露見を恐れながらも、密かに受け継いできました。この「お船様」がもたらす恵みと災厄の顛末が、年季奉公に出た父の帰りを待つ伊作の目を通して描かれています。

村には、米を積んだ「お船様」が訪れた翌年、厄除けの「赤い猿の面」と「赤い着物」を身に着けた死者を運ぶ船が到来します。この死者は痘瘡（天然痘）に感染したことで、海に流された者たちでした。しかし、痘瘡と認識できず、赤色を慶事と捉えた村人たちは、剥ぎ取った「赤い着物」を分配し、やがて感染が広がります。恵みの「お船様」が一転、災厄となる展開が、冷徹な緊張感みなぎる表現で描き出され、共同体である村を維持し、存続させ、生き抜こうとする村人の姿を浮き彫りにしています。

感染症と向き合う私たちは、どのように歩むことができるのか、コロナ禍の現在が重なり、深く胸に迫る作品です。〈学芸員 深見美希〉

※「新潟日報」（夕刊）昭和57年4月20日

00年）には新装版（講談社文庫）が発売されました。すべて上下巻で構成されています。

五郎治は当時死病と恐れられていた天然痘を予防する種痘（牛痘法）を、日本ですべておこなった人物です。吉村は五郎治が生まれた青森や、ロシアからの帰国後暮らした北海道にも調査に向かい作品を描き上げました。

上巻には、五郎治がエトロフ島から連れ去られていく過程やロシアでの生活、下巻には、帰国や種痘をするようになった経緯について丁寧に描かれています。その緻密な描写は、五郎治の人生を追うだけでなく、鎖国政策下の日本の置かれた状況を、国内外の視点で浮き彫りにしました。

また『花渡る海』（昭和60年 中央公論社）でも「北天の星」に登場する水主久蔵を主人公に、天然痘に立ち向かう人物を描いています。

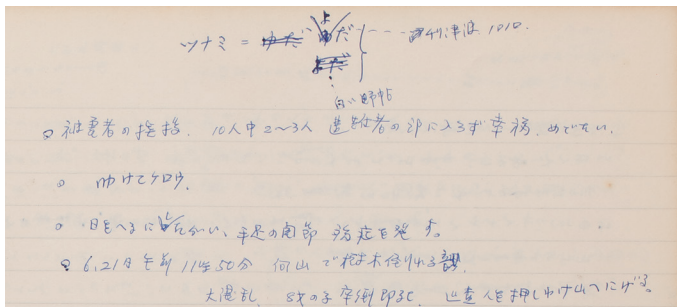
私たちの生活は、治療方法がわからない伝染病に立ち向かった人々の歴史の上に成り立っていることを、改めて考えさせられる作品です。ぜひ、ご覧ください。〈学芸員 北山ゆかり〉

吉村昭と震災小説

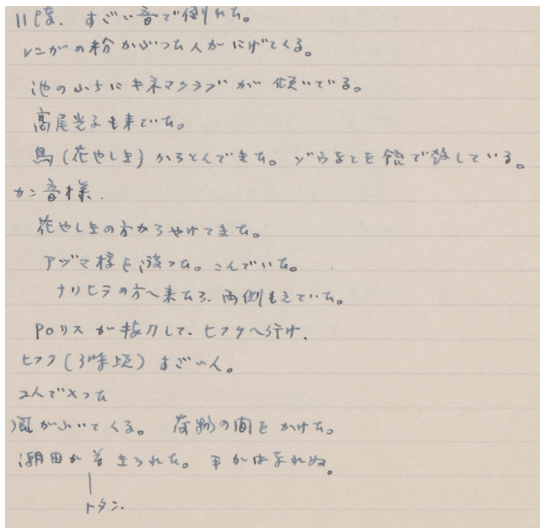
―「三陸海岸大津波」と「関東大震災」を中心に―

今も三陸海岸を旅すると、所々に見える防潮堤とともに、多くの死者の声がかんたえるような気がする。

【「三陸海岸大津波」平成16年 文春文庫
会期：令和2年2月21日(金)～2月28日(金)
7月10日(金)～7月15日(水)
*新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館により、会期と内容を変更しました。
*ホームページでは、展示資料を掲載した解説シートを公開しています。



津波に関する自筆ノート 津村節子氏寄託資料
明治29年の津波発生時の証言を記録した箇所。最上部に「ツナミ＝よだ」と書き込みがある。吉村は、三陸沿岸には「津波」を表す特有の地方語があると考えた。岩手県下閉伊郡田野畑村の村民が語る体験と文献資料を検証し、「津波」と「よだ」が同じ意味で使用されていたことを突き止めた。『三陸海岸大津波』では、「二昭和八年の津波」の「津波・海嘯・よだ」に記している。



「関東大震災」に関する自筆ノート 津村節子氏寄託資料
小櫃政男氏が、浅草で友人と映画鑑賞中に被災した証言を記録。友人と逃げるも、目前で12階建ての凌雲閣が倒壊。避難した本所被服廠跡で、友人が、飛ばされてきた「トタン」で首を負傷し、小櫃氏と手を繋いだまま、凄惨な死をとげる過程を記す。

吉村昭は、昭和45年(1970年)、体験者への取材を行い、埋もれていた郷土資料や記録を調査し、『海の壁』(中公新書、改題「三陸海岸大津波」)を刊行しました。明治29年(1896年)、昭和8年、昭和35年に三陸沿岸を襲った津波の実態と、津波の歴史と共にある人びとの営みを記しました。

また、証言を集め、膨大な文献資料を調査して著した『関東大震災』(昭和48年 文藝春秋)では、凄まじい地震被害の実状と、人心の混乱が生んだ社会事件を克明に描き出しました。

今回は、この2作に関する自筆取材ノートや調査資料を紹介しました。また、『三陸海岸大津波』(平成16年 文春文庫)を踏まえて執筆された高山文彦『大津波を生きる 巨防防潮堤と田老百年のいとなみ』(平成24年 新潮社)や、森健編『つなみ被災地の子どもたちの作文集 完全版』(平成24年 文藝春秋)など、15点の資料を展示しました。

さらに、平成26年(2014年)までに刊行された東日本大震災を背景に描かれた小説をパネル展示し、現代の作家たちが震災を書くことに、どのような向き合ってきたのかを紹介しました。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、明治、昭和の津波や地震と異なり、福島第一原子力発電所の事故を生み、現代に潜む問題を浮き彫りにしました。その中で「三陸海岸大津波」と「関東大震災」は、読み継がれてきました。吉村が記した人びとの証言や記録の検証からは、自然災害による死者の存在が浮かび上がります。

時代を経て、直面する問題が変化してもこの2作には、常に立ち返るべき教訓が刻まれています。〈学芸員 深見美希〉



自宅でスイトンを作る吉村と見守る津村節子氏
写真提供 毎日新聞社

瀬戸内寂聴と津村節子

会期：令和2年7月17日(金)
9月16日(水)

瀬戸内寂聴氏は、当館友の会発起人の一人でもあり、津村節子氏は、吉村昭の妻で、ゆいの森あらかわの名誉館長です。本展示では、当館とゆかりの深い両氏の出会い、そして少女小説の執筆者として活躍した二人の交流について取り上げました。さらに、万年筆や万華鏡をはじめ、徳島県立文学書道館からお借りした瀬戸内氏愛用の品々を展示しました。

同人雑誌「Z」での出会い

津村節子、吉村昭、瀬戸内寂聴の出会いは、昭和31年(1956年)に小田仁二郎が主宰した同人雑誌「Z」でした。津村は苦しい生活の中で執筆を続けた当時を「あの修業時代は、私たちにとってすごく貴重な時代だったと思います」と振り返っています。津村にとって瀬戸内は、同じ修業時代を過ごした仲間でした。

展示では、丹羽文雄が主宰した同人雑誌「文学者」に吉村、津村



瀬戸内寂聴氏愛用の品々 (徳島県立文学書道館蔵)
前列左より、原稿用紙、万年筆、拡大鏡、眼鏡。
後列左より、万華鏡、ペーパーウェイト (ハカラ製)、ペーパーウェイト (岡本太郎作)。

昭和40年に津村は芥川賞、翌年に吉村は太宰治賞を受賞。一方瀬戸内は、昭和48年に出家し、翌年京都に寂庵を開き、それぞれ小説家の道を歩み進めていきます。「Z」時代はお互いの家を行き来していましたが、忙しさを案じ、夫婦で京都へ行っても寂庵を訪ねませんでした。しかし、自宅近くで瀬戸内のサイン会があると聞いて、会いに行くことにします。冒頭の言葉はその時吉村が津村にかけた言葉です。

※『遥かな道』平成26年 河出書房新社

二人の「少女小説」作家

現在も作家として活躍している津村と瀬戸内。二人には、同じ同人誌で活躍していたこと以外に、少女小説家として多くの作品を執筆していたという共通点があります。ここでは、学習院大学短期大学部在学中から書き始めた津村と、少女小説の掲載をきっかけに上京を決意した瀬戸内、それぞれの少女小説執筆の背景に焦点を当てました。

また、「少女世界」9月号(昭和26年 富国出版社)の一部をパネルで紹介しました。目次には、面識の無かった二人の名が隣り合っており、並んでいます。「少女世界」は、二人の作品が初めて掲載された雑誌でもありました。

学芸員ノート1

第9回トピック展示では、吉村が作成したスクラップブックを展示し、『関東大震災』刊行時のインタビュー記事も紹介しました。現在、当館で収蔵している吉村のスクラップブックは、昭和41年から平成16年までの23冊(津村節子氏寄託資料)です。自らのインタビュー記事や寄稿、著作の新聞案内や書評、映像化のニュース、先輩作家に関するものなど、小さな記事も丁寧に切り取り、整えて貼り付けています。中には、記事本文に修正を書き加えたものもあります。

作家が歩んだ歳月の重みとその人柄、創作への姿勢が感じられるスクラップブック、展示の際には、ぜひ注目してください。

大正12年9月1日、日暮里で関東大震災に遭遇した吉村の両親は、食料が欠乏し、スイトンを食べたことから、毎年9月1日の夕食をスイトンと決めました。吉村は、スイトンを食べながら、両親が体験した震災の話聞いて育ちました。結婚後も、この習慣を受け継ぎ、妻の津村節子氏や長男、長女と一緒に、9月1日はスイトンを食べました。写真は昭和48年、「一家の主」連載中(毎日新聞社)の取材で撮影したもの。味噌の量にこだわりながらスイトンを作る姿です。

学芸員ノート2

展示期間中は、証言映像「瀬戸内寂聴 吉村昭・津村節子を語る」(平成28年度制作)を放映し、連日多くのお客様にご覧いただきました。この映像は会期終了後も2階常設展示映像コーナーで視聴いただけます。皆様のご来館をお待ちしております。

〈学芸員 北山ゆかり〉

寂庵へ行くのは迷惑だろうけど、サイン会にはみんな行くんだから、ちょっと二人で行ってみようか (吉村昭)※

#『熊嵐』 実物大熊再現パネル

フォトスポットを設置しました

令和2年7月〜10月、当館初の試みとして、吉村昭記念文学館2階エントランスにフォトスポットを設置しました。このフォトスポットは、三毛別熊事件を扱った作品、吉村昭『熊嵐』(昭和52年 新潮社)に登場する熊を実物大で再現したものです。

熊の体長は2.7m。とても迫力のあるフォトスポットに仕上がりました。来館者の皆様に、吉村昭の作品を視覚からも体感していただく、という趣旨のもと、当館学芸員が製作しました。

リアルな熊の姿を再現する為、熊の画像は、北海道にあるのぼりべつクマ牧場から借用しました。
11月からは、ウェブで戦史を扱った展示を行うに伴い、2階エントランスにて、戦艦武蔵のパネル展示を行っていきます。こちらもフォトスポットとしてお楽しみいただけるよう工夫を凝らしています。武蔵の画像は広島県の大和ミュージアムから借用しました。
今後も吉村作品のテーマに沿ったパネルを製作し、フォトスポットを設置していく予定です。

〈学芸員 稲垣慶子〉



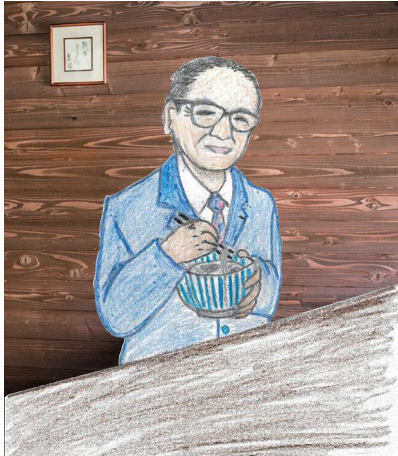
フォト
スポット

写真提供：のぼりべつクマ牧場
ダイキチくん



足跡をたずねて 〜愛媛県宇和島市 やまこうどん〜

吉村昭が好きだった町、愛媛県宇和島市。そこに早朝だけ営業するうどん屋がありました。随筆「朝のうどん」でおなじみの「やまこうどん」です。吉村はこのうどんの味に魅せられ、宇和島に行く度に朝はここのうどんを食べました。店内には、吉村が贈った色紙「朝のうどん」が飾られています。県外にも多くのファンを持つやまこうどんですが、今年の7月22日に閉店を迎えました。道具の傷みが激しく、後継者もないことから決断に至ったそうです。閉店を聞きつけて訪れたお客さんの中には「吉村昭さんのファンで色紙を撮りにきました」という方もいたといいます。



具は、ジャコ天と称するジャコ（小魚）のすり身の揚げたものを薄切りにした数片と刻んだワケギで、客は勝手に好んだ量をのせてカウンターで食べている。客の中には、調理場にある鍋にうどんと汁を入れて、ガス台にかけて煮ている人もいます。（中略）うどんには程よい腰があつて、汁が絶妙にうまい。（朝のうどん）『わたしの普段 着』平成17年 新潮社

随筆にも登場する現店主に、吉村の印象を尋ねると「威張った顔をしない、穏やかな感じ。『先生、久しぶり』って言うのと、にっこり笑って『久しぶり』って」と、楽しそうに思い出を語ってくれました。閉店の日は、長蛇の列ができ、最高の店終いになったと感激の言葉を残してくれました。
惜しまれながら、その歴史に終止符を打ったやまこうどん。またひとつ、吉村がとりこになった名店が姿を消しました。
〈学芸員 鈴木志乃〉

お知らせ おしどり文学館協定

平成29年11月5日に吉村昭記念文学館と福井県ふるさと文学館は、「おしどり文学館協定」を締結しました。
この度、おしどり文学館協定に基づき、荒川区・福井県合同展示を開催します。

*おしどり文学館協定締結の経緯は、「万年筆の旅」vol.10をご覧ください。

吉村昭記念文学館 第11回トピック展示

「吉村昭が描いた天狗党 ―「動く牙」と「天狗争乱」福井の旅―

会 期：令和2年9月18日(金)〜同年12月16日(水)
午前9時30分から午後8時30分まで

休館日：11月19日(木)、12月4日(金)

場 所：吉村昭記念文学館 2階 エントランス、
著作閲覧コーナー

内 容：元治元年(1864年)に起きた天狗党の乱を題材に、世の中に取り残されていく尊王攘夷派を描いた歴史小説「動く牙」と「天狗争乱」を紹介し、福井県での調査資料や自筆資料を中心に展示します。

平成6年 朝日新聞社



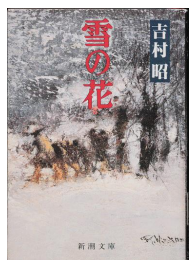
荒川区・福井県合同展示

福井県ふるさと文学館 特集展示「吉村昭と医」

会 期：令和2年10月3日(土)〜同年11月23日(月・祝)
平日は午前9時から午後7時まで
土日祝日は午前9時から午後6時まで

休館日：毎週月曜（休日の場合は翌日）
祝日の翌日

場 所：福井県ふるさと文学館 文学の小路
内 容：吉村昭が福井の医家、笠原良策を描いた『雪の花』を紹介し、「めっちゃ医者 伝」の自筆原稿（複製）や、村上豊作「雪の花」挿絵（複製）などを展示します。



昭和63年 新潮文庫

ふるさと風花文庫

吉村昭記念文学館3階企画展示室横の福井県コーナーに「ふるさと風花文庫」を配架しました。福井県ふるさと文学館よりお借りした図書110冊です。若手作家や、郷土の作家など、5つのテーマでまとめられています。ご利用は、館内閲覧のみです。ふるさと風花文庫の本を手に、図書館でのひと時をお過ごしください。
期 間：令和3年3月31日まで



『熊嵐』執筆物語



『熊嵐』の舞台再訪 苫前町の射止橋にて

昭和59年(1984年) 6月23日
苫前町郷土資料館蔵